

北陸大学ライブラリーセンター報

Bulletin NO.14

⇒をクリックすると本文がご覧になれます。

⇒ 簡素な生活

高田 維有(国際交流センター教授)

⇒ 私のワシントン留学時代のライブラリー活用法

川上 高司(法学部教授・アメリカ政治担当)

⇒ 病気の予防と治療

— 東洋医学の考え方のエッセンス —

程 炳鈞(薬学部講師・東洋医薬学担当)

⇒ 未知との遭遇

— 更なる図書の利用促進を願って —

大市 昌弘(薬学部4年生)

⇒ 勉強の宝殿

— C L E V E R HOUSE —

チヨウ
趙

リ
莉(外国語学部英米語学科3年編入生)

⇒ 図書館利用の勧め

川畑 拓哉(法学部政治学科3年生)

⇒ ささやかな楽しみ

岡崎 和子(外国語学部助教授)

< Bulletin NO.15 >



北陸大学ライブラリーセンター報
2nd-Half 2002



簡素な生活

高田 維有



平成14年6月、哲学の里・宇ノ気町に石川県西田幾多郎記念哲学館が開館した。安藤忠雄氏設計によるコンクリート打ち放しの建築は、周囲の環境と見事に調和し、最上階の展望ラウンジから眺める白山連峰の美しさは格別であった。

館内で充実したひとときを過ごし退館する時、11月刊行予定の『新版西田幾多郎全集』の予約申し込み受付が行われていた。『善の研究』で知られる西田哲学は、大学時代に奮ったことがある。また幾多郎とともに「四高の三太郎」といわれた鈴木大拙の全集の隣りのスペースに並べて置くのもいいなという思いが脳裡をかすめ、何の躊躇いもなく申し込み用紙を手にしていた。正にその時、突然「お前はいつになったらこの全集を読む余裕ができるんだ」という声が響き渡った。

どんなにIT革命が進展し便利な世の中になっても、一日は24時間という厳然たる事実があり、歳をとったらとったなりに生活のペースは落ち、自分の自由になる時間は極めて限られたものになると考えねばならない。今は忙しいから見たいTV番組を録画し、或いは音楽を録音しておき、将来暇ができたらくっくり楽しもうと膨大なライブラリー作りに精を出している友人、知人は沢山いる。そんな彼等を醒めた目で見ていた自分自身も、結局は同じ穴の貉だったのだ。

還暦を迎えた或る日、人生の伴侶がぼつりと言った。「もうこれ以上本を買うのは止めましょうね。そろそろ身の回りを整理して簡素な生活にシフトダウンしましょう。これからは図書館を利用したら」と。自分が読みたい本はいつも身近に置き、読みたい時にいつでも手にできるという安心感こそが、ささやかな贅沢だと思っていたが、何故かこの時は反論する気にはなれなかった。

私の読書歴は長い。大学受験の難関を突破するまでは読書を控えるようにという恩師の忠告に逆らって勢みがついた読書熱は、ついに下がることはなかった。時期も悪かった。文庫本、全集物、翻訳物が次々と登場してきた活字文化全盛時代の幕開けのときであり、装丁に凝った、読書欲、購買欲をそそる本が書店に溢れていた。読みたい本に出会うとすぐに手が出る悪癖は、ついに不治の病となり今日に至っている。しかし時代は移り、読みたい本を買い損なっても、「オンデマンド出版」という新しい商売が誕生したお蔭で、金さえ出せば絶版本ですら容易に手に入る、便利だが味気無い世になった。

このような揺れ迷う心に、最後の審判を下してくれる大先輩が現われた。「引越しを機に別棟で書庫を作ったがとても収納しきれず、身を切られるような思いで少しずつ処分している。目方売りに近い状態で本当に情無くなるよ」と。自分自身の成長とともに、それなりに苦労して買った本は、どの本にも夫々の思い出があり、愛着がある。大袈裟な言い方をすれば、人格形成の貴重な糧となった、わが人生の生き証人的存在なのである。だからと言って、仰々しいご託宣のもと子供達に無理矢理押し付ける筋合いのものでもない。となると大変忍びないことではあるが、自らの責任で世話になった一冊一冊の本に心から感謝しつつ引導を渡し、機会をみて「本供養」をしてやらねばなるまいと考えている。(国際交流センター教授)



私のワシントン留学時代のライブラリー活用法

川上高司

アメリカのマディソン第4代大統領は、「人民は知の力で武装せねばならない」と述べているが、この言葉が、アメリカン・ライブラリアンシップの原型としてしばしば引用される。アメリカはライブラリーに対して特別に思い入れがある国である。ライブラリーはアメリカの建国期以来、見識ある市民を育成する重要な場所として活用されてきた。ライブラリーは単なる本の置かれた場所ではなく、知の交流する場であり、創造性の芽を育てる場となってきた。

私もこういったアメリカのライブラリアンシップを享受した一人である。私がワシントンのジョージタウン大学院へ留学中のことである。大抵の学生にとってそうであるように私にとっても深夜までオープンしている大学のライブラリーは生活の一部であった。

大学院の講座からは必ずリーディング・アサイメントがある。一週間に最低二千～三千ページの書物を読みこなさなければ授業についていけない。そのために、まず、ライブラリーから書物を借り出し、そこで徹夜して読むのである。そうすると、当然ながら読書環境のすぐれているライブラリーの中での場所の確保が問題となる。ほとんどの学生がこのような生活をセメスターの間やっているから、当然場所の取り合いとなる。私は、経営学部のあるスペイン風の建物の最上階にある図書館の一角を見つけ、そこが私のお気に入りの場所となった。私は政治学部であったので別学部の図書館の使用は禁止されていたが、親しい友人の手引きでいつも使っていた。一見、隠れ家みたいなお気に入りの席の窓にはアイビーが巻き付き、そこから大学の中庭の教会が見え読書するには最高の環境であった。そこで朝夜を問わず本と共に生活をした。

また、米議会図書館も大いに活用した。一九世紀末に大理石で建てられた議会図書館は全米でも有数の美しい公共建築と言われ、豊富な壁画、彫刻、グーテンベルク聖書などの貴重品がある知識の殿堂は知的雰囲気漂わせていると同時にアメリカ文化のルーツを彷彿させる。アメリカは新天地を求めて外国から様々な宗教・民族的背景をもつ人々が人工的に建設した国家である。そうした人々の子孫がときとして自分達の選んだ道が正しかったことを再確認するための役割も、アメリカのライブラリーは兼ね備えている。アメリカの図書館は、その文化・精神的紐帯となると同時にヨーロッパとの文化的連帯を確認する装置となっていて、古代ギリシアから中世、近代を経て流れ込んでいる西欧文明と個々の結びつきを自覚させるシンボルとなっている。

そのような空間と時間を超えた場である議会図書館を私は大いに楽しんだ。このような留学時代に習得した情報収集、教養拾得、知的交流の場としてのライブラリーの活用法が私の現在の学究生活の基礎となっている。現在、私は年に2～3度はワシントンを訪れるが、議会図書館は私の必ず訪れる場所の一つとなっている。

(法学部教授・アメリカ政治担当)

病気の予防と治療

東洋医学の考え方のエッセンス

程 炳 鈞



一、病気の予防

東洋医学では、病気の予防を強調しています。漢方・鍼灸の古典書籍（中国春秋戦国時代）『黄帝内経・素問』の第一篇『上古天真論』には、“虚邪賊風、避之有時”（虚に入る邪、人を害する風、これを避けるに時あり）ということが述べられています。医者から“寒くなったので風邪を引かないようにお大事にしてください”と言われるのは、ただ丁寧な言葉だけではなく、“虚邪賊風、避之有時”という意味も含んでいます。

東洋医学は病をひき起こす素因の外部からの侵入を予防すると同時に、特に人体の内在要因である“正気（真気）”の重要性を強調し、さらに“恬憺虚無、真気従之、精神内守、病安従来”（恬憺（てんたん）虚無なれば、真気（しんき）これに従い、精神内に守れば、病いずこより来る？）と述べています。

人間は誰でも感情ということを持っていますが、東洋医学ではその感情を“七情”と呼び、喜、怒、憂、思、悲、恐、驚の7種類の情志の変動を指します。つまり七情とは、外界事物に対する内在の情緒反応のことであり、人間の正常的な精神活動です。通常は発病因子にはなりません。けれどももし喜怒哀楽が過ぎると、精神上過度の刺激を受け、不愉快の心境やストレスを長期間解消できなければ、臓器の生理機能に影響して疾病が引き起こされます。例えば『黄帝内経・素問・拳痛論』には、“怒則気上、喜則気緩、悲則気消、恐則気下、驚則気乱、思則気結”（怒ればすなわち気が上がり、喜べばすなわち気が緩む、悲しめばすなわち気が消え、恐れればすなわち気が下がる、驚けばすなわち気が乱れ、思えばすなわち気が結ぶ）とあります。臨床では、喜・怒をきっかけとして起こった脳卒中や心筋梗塞の患者さんが少なくありません。何らかの原因で悲しみ過ぎると元気は出ませんし、突然の恐怖を受けると失禁します。ひどすぎると精神病のきっかけにもなりかねません。思えば思うほど解決できなくなり、ずっとくよくよ悩んでいると腫瘍の原因になるという学説もあるくらいです。ですから円滑な気血の流れには、安定した感情は不可欠のものであり、円滑な気血の流れは体力を養い抵抗力を生みます。逆に気血の流れが乱れると、陰陽のバランスが崩れ、病気の原因となります。

人間は、大自然の法則に従って生きなければなりません。人間は、地球の上に暮らしている生物の一種であり、人と自然の関係は、「人与天地相応」（人と天地とは相応ず）ということです。「相応ず」とは、自然界の変化が人体に影響を与えるとき、人体は必ずそれに相当する反応を起こすということです。故に『黄帝内経・素問・宝命全形論』には、“天覆地載、万物悉備、人由為貴、人稟天地之気生、四時之法成”（天は覆い地は載せ、ここに万物悉く備われども、人より貴きものなし、人は天地の気をもって生じ、四季の法成る）とあります。人の生命活動は必然的に大自然の影響を受けますが、それに相応しなければ病気になるります。人は大自然の作用に依存してこそ生命の存在があり、しかもその他の生物と同様に、四季

の生、長、化、収、蔵という自然の規律に順応しながらその生命活動の過程（生、長、壮、老、已）を完成します。

古代人は自然環境に適応することと精神修養の二つの面に重視し、同時に“正気存内、邪不可干”（正気が内に存すれば、邪気は犯すことができない）というポイントを強調しました。

そのため古代人は運動を重視しています。「流水不腐、戸枢不蠹」（流れは腐らず、毎日使っている戸のささえは虫に食われない）というように、運動は恒常的なものと考え、命にも運動することを要求し、病気の予防に役立てました。

要するに、病気の予防には；1、情緒を安定させコントロールすること；2、大自然の法則に従い生活すること；3、適切に運動し、感染症から身を守ることが大切であります。

二、病気の治療

東洋医学では、病気を治療する手段として、主に薬物療法（漢方薬）、針灸療法、導引法（気の安定・気の流れを安定させる精神療法）、按摩療法（按摩、推拿、整体、整骨など）があります。東洋医学は、陰陽五行説という哲学を基本とし、これによって人と自然との関係及び内臓との相互関係を理解し、体のバランスを整えることを目的に病気の原因、状態、診断、治療、予防、養生などを考え、経験を重視して治療を行います。

現在、日本では、漢方というと皆さんはすぐに薬草での治療法を思い出すでしょう。ある人は、こういった治療法を古くさいと考えるかもしれません。ここで薬草の治療法を信じていない方に中国のことわざを紹介したいと思います。「但知五穀之療飢、不識百草之濟命」（単に穀物を食べれば飢餓感がおさまることは知っているだけで、薬用植物が命を救うことは知らない。）人間の残念な点を指摘しています。食料も薬用植物も大自然の恵みであり、大自然に育まれた植物は病気の治療のため、その一部を漢方医が使っています。

多くの漢方医の経験を踏まえ紀元前後には漢方医学の理論を確立し、約1800年前に医聖と呼ばれる「張仲景」が『傷寒雜病論』という医学書を完成させ、漢方医学の理（理論）、法（治療方法）、方（処方せん）、薬（生薬の薬性と薬能）完備的な漢方医学体系が確立しました。長い歴史の流れの中で、中国でも日本でも国民の健康を守ることに大変重要な役割を果たしてきました。漢方は、1980年代にWHO（世界保健機関）に伝統医学として指定され、1997年10月には、北京での「世界中西医結合大会」（東洋医学と西洋医学との併用を行うための大会）が開かれ、それがきっかけとなり、世界の漢方医学及び東洋医学と西洋医学との結合ブームが起きつつあります。

漢方医学の効果が期待できる病気は何ですかとよく聞かれます。日・中両国の漢方医はどんな病気に対しても漢方で治療を試みてきました。しかしどんな優れた医学でも限界があります。東洋医学も例外ではなく、例えば先天性・遺伝性病気には治療法がないのです。けれども東洋医学は西洋医学によって診断がつかなかったり、診断がついても治療法がないような疾病に対して、治療が行えます。それは漢方医学の診断である「証」の決定をスムーズにするための「基本ルール」が存在しているからです。最高の原則と言えば、「復其所固有、除其所本無」（人間の体はもともと持っているもの 気、血、津液、正常な機能等、それが足りなくなったら、漢方医学で回復させることができる；もともと持っていないもの 主に「邪気」

を言い、つまり体に邪魔をするものを指します。例えば水湿の邪気、瘀血、異常に出てきたもの等、それが体の中に異常に存在すれば、東洋医学で ハリとお灸療法も含む 除かせることができる)ということです。そのような治療原則に従って、お医者さんが臨床的に患者さんの色々な病気、様々な苦しい症状に対して治療しているのです。『黄帝内経・素問・通評虚实論』には、「邪気盛則実、精気奪則虚」邪気(体に有害するものを指す)が盛んになれば、すなわち実証となり；正気(体を支えて健康な体があるべきものを指す)は奪われれば、すなわち虚証となる。漢方医学では人間の体の中に何かが足りなかったら治療法によって補い、何かが体の邪魔をしていればそれを除かせる。ある場合には患者さんの体を補いながら邪気を除かせる。これを「攻補兼施」と言い、また「扶正除邪」とも言います。いずれにしても東洋医学は、人体の自然の健康バランス(修復力、免疫力、神経、ホルモンの内分泌系の動的な平衡性など)を回復させようとする素晴らしい治療法ですので、病気の治療に役立つものと信じています。

三、最後に

本学は、設立当初より西洋医学・東洋医学双方の教育を行うことを基本方針のひとつとしています。東洋医学と西洋医学両方とも、病気の予防・治療を目的として発展してきた医薬学であります。「東洋医薬学教室」では、基礎理論及び漢方臨床の実際・漢方調剤の実際的研究や高脂血症・高コレステロール血症、高血糖に対して漢方薬の役割等を研究しております。

「社会に役立つ薬剤師」を目指すのであれば、視野をもう一步広げて、この貴重な勉強環境を利用して、東洋医学・和漢薬概論など一連の東洋医学関連講義の基礎知識を身に付け、より幅広い知識を持つ薬剤師として活躍してほしいと願っております。東洋医学の治療法(主に漢方のエキス顆粒剤)が薬剤師の仕事の中の一つ業務となっている現在、薬剤師の仕事に対しては即戦力となる人材が社会に広く求められており、こうした社会のニーズに対応した充実した教育を受ける機会のある本学薬学部生は、就職戦線へ向かう場合にも有利となるはずであります。

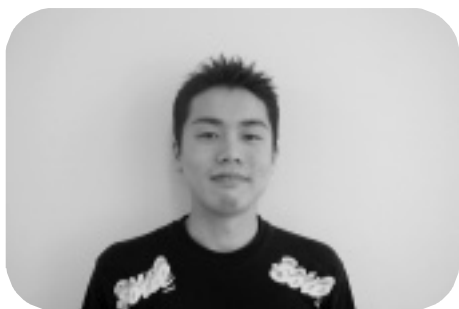
ライブラリーセンター薬学部分館には、沢山の「漢方医学」、「和漢薬学」に関する図書や雑誌が揃っています。是非、皆様のご活用を期待しております。(薬学部講師・東洋医薬学担当)



寄贈図書

本学の教職員等から、下記のとおり図書の寄贈がありました。ありがとうございました。

| 著者 | 書名 | 寄贈者 |
|---------------|----------------|----------------|
| 河島 進ほか編集 | わかりやすい調剤学 第4版 | 河島 進(学長・薬学部教授) |
| 堀 太一 | 新聞の秘密 | 堀 徹男(法学部教授) |
| | 獨逸民法 復刊版 他計93冊 | 故 佐々木吉男先生(前学長) |
| 山本郁男 | 山本郁男画集 | 山本 郁男(元薬学部教授) |
| 山本郁男教授退任記念事業会 | 山本郁男教授退任記念誌 | 山本 郁男(元薬学部教授) |



未知との遭遇 更なる図書の利用促進を願って

大市 昌弘

図書館で4月からアルバイトを始めて、はや5か月が経った。業務として当然館内の様子を見るが、常連の人は、いつもほぼ同じ机で勉強している。空いていれば1人で1つの机を使えるが、空いている机が無ければ、相席せざるを得ない。参考書や文具の置き方でどっちが後から来た人かは一見で分かり、大抵後から来た人は心無しか足を外側に向けて、背中を丸めて勉強している。

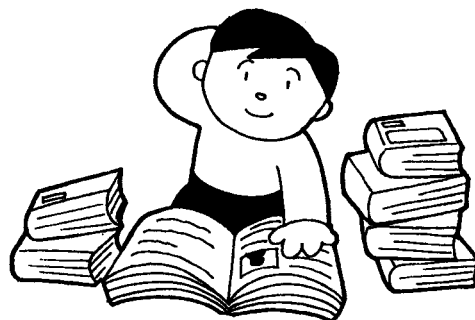
図書館業務における重要な仕事の1つに返却された図書を書架に配架する仕事がある。書架は、分野ごとに分けられており、更に書架の中で図書は分類順に並べられている。たまに、書架に図書が入りきらないことがあり、良く見てみると、全く異なる場所の図書が配架されていることがある。読んだ図書は元の場所に戻さなければ、次にその図書を探す人が探せなくなるので、きちんと元に戻して欲しいと思う。

私が、図書館で最も利用するスペースがある。それは、やはり国試対策図書である。薬学部学生にとっては、最も大切な学問であり、私自身、今年度の合格を目指し、日々国試対策図書と悪戦苦闘している。本学は、国試対策に対してきめ細かなバックアップ体制を取っており、薬学図書館には国試対策図書が充実しており、大変有り難いかぎりである。

図書を書架に戻していると、書架の隅の方に「一体誰が読むのだ？」という図書に出会うこともある。好奇心も手伝ってその図書を手に取ると、そんな図書の中にも、面白い本が多々ある。例えば、『教授退官記念誌』等は、その先生の偉大な業績や波瀾に満ちた半生が書かれてあることが多く、NHKの「プロジェクトX」の番組にも引けを取らない内容であったりすることがある。図書館を殆ど利用しない人も、良く利用している人も、たまには、色々な「本」を手に取り「誰が読むのだ？」という観点から「本」を探してみてください。運が良ければ、人生の道しるべとなる「運命」の1冊と巡り逢えるかも知れません！

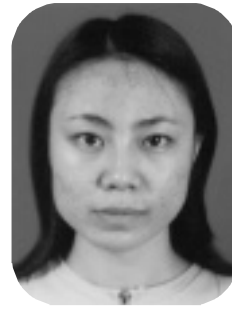
最後に、図書館でアルバイトをさせて頂き、利用者の皆さんが、より一層色々な図書を手にすることにより、一人でも多くの皆さんが、正しく「未知との遭遇」に出会えることを、願っています。

(薬学部4年生)



勉強の宝殿 CLEVER HOUSE

チョウ
趙 リ
莉



初めて日本に来て、北陸大学に入学したとき、本が大好きな私は、最初に大学の図書館を探しました。私は一貫して、ある大学に行けば、まず、第一にその大学の図書館を見学しています。大学施設の水準を評価すれば、一つはその図書館の良し悪しに基づき、そして、良い環境で勉強出来れば、私達は、自分の将来について、自信が満ち溢れてくると思います。

中国にいたとき、母校には勿論図書館があり、毎日、図書館で授業の予習や自習をしていました。大連外国語大学の図書館は7階建の建物です。1階は、沢山の書架が配架されており、中国の図書は言うまでもなく、外国語の図書も沢山配架されています。2～4階は、雑誌の閲覧室と自習室で、5階は視聴覚教室で、6階はコンピュータ教室で、7階は、映画館になっています。

北陸大学の図書館「CLEVER HOUSE」に足を踏み入れた瞬間、濃厚な勉強ムードに魅了されました。1階はパソコンが沢山あり、それを利用して様々な情報を収集できます。そして、書架には、色々な雑誌があり、その中で、私が驚いたのは、意外な中国語の雑誌を発見しました。それは、今、若者に大変人気のある雑誌の一つである『大衆電影』です。そればかりでなく、世界各国の著名な新聞も揃っており、毎日、新聞を読むのが私の楽しみの一つで、新聞を読むことにより、私の視野を広くさせてくれます。1階のフロアは限りあるスペースの中に、あらゆるものが完備されており、まさに、中国の諺でいう、「麻雀虽小、肝胆俱全」(限られた規模だが、何もかも揃っていること)に例えられると思います。

2～4階は、「CLEVER HOUSE」の主体部分で、各国言語の図書はさることながら、政治・法律・経済・文学等の蔵書量が豊富で嬉しい限りです。

私達、留学生にとっては、国際交流センター内にあるAVルームでビデオや語学検定問題等の視聴覚教材を良く利用します。映画や問題集等を借りることにより、日本語や英語の語学学習に役立っています。

たまには、中国の映画を見て故郷を思い出したりもします。とても懐かしく感じます。こんな良い環境で勉強出来、私達は未来に明るい希望を抱くことが出来ます。さあ、留学生の皆さん「CLEVER HOUSE」へ行こう！

(外国語学部英米語学科3年編入生)





図書館利用の勧め

川 畑 拓 哉

私は図書館の落ち着いた雰囲気がとても気に入っています。その図書館に私は最近頻繁に通っています。勉強もでき、静かで本の多さ、また何より集中力が持続することが通う理由です。

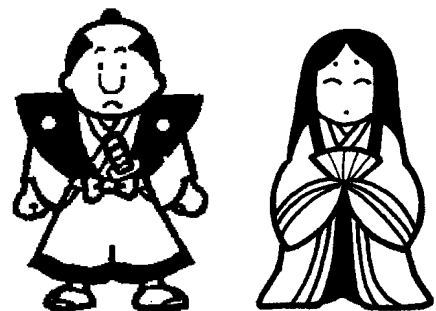
最近私がよく読む本は歴史関係の本です。ミーハーな私にとって、金沢が舞台となっている大河ドラマの「利家とまつ」が多かれ少なかれ影響を与えているのは事実です。図書館に『日本全史』というとても分厚く、重たい本があります。字を見れば分かると思いますが、字のごとく「日本の全ての歴史が分かる本」です。私はこの本を時間があるときよく読みます。この本はその年に起こった事件や災害、発見・発明などわりと詳細に書いているので、今まで大まかに知っていたことに補足をするためのような本として私は利用しています。この本を読んでいると、各時代で活躍した人物の考えや思いを知ることができ、私もよく考えさせられます。『日本全史』に限らず、歴史関係の本は読むとおもしろく、読みふけってしまいます。私も時間を忘れて読み続けてしまったことが何度かあります。それだけ本がおもしろい、本を読むことが好きということでしょうね。

けれど、今考えると私は本を読むことが得意ではありませんでした。しかし、私は大学に入学してから「調べる」ことが好きになりました。そのあたりから本を読み始め、今ではなくてはならない存在になりました。現在、本だけでなくインターネットの普及で時に本よりも詳しいホームページがあります。その影で「本の価値」というものが問われていると新聞に書いてありましたが、私はインターネットと本のよい部分だけを吸収しています。読んだり調べたりしたことは必ず自分の力になると私は思います。

図書館には、新聞・パソコンなど本以外にも魅力のあるものがたくさんあります。これらを使い、図書館を利用した人たちが何か新しい考えや知識を吸収すれば、図書館はその役割というものを果たしているものだと考えています。図書館は本を読むにも勉強するにもよい環境です。みなさんも空き時間などを利用して図書館を利用してみてはいかがでしょうか？おもしろい本が見つかるかもしれないし、人生観やこれまでの考えを変えてしまう本との出会いがあるかもしれません。

その可能性は未知なるものです。私はこれからも歴史関係の本を中心に読んでいき、教養を深めたいと思っています。最後にこのようなすばらしい機会を与えてくださいました方々に心より感謝いたします。ありがとうございました。

(法学部政治学科3年生)



ささやかな楽しみ

岡崎 和子



毎月手に取るのを楽しみにしているものがある。出身大学の同窓会報がきっかけで、数年前から遠くの或る社会福祉施設に、ほんのわずかばかりの寄付という形で関わるようになったのだが、そこから毎月送られてくる通信である。

それは通常6ページで、内容は、その理事長（志を持って創設した前理事長が髄膜腫の手術の失敗で重度身体障害者となり、後を継いだその夫人。素人ゆえ、そのような立場に置かれることになるとは思いもよらなかったという。お会いしたことはない大学の先輩である）の所感・論説、施設の外部にあって深い共感を寄せ支えている人々の寄稿文、翻訳連載物、施設の一カ月の歩みの記録、と毎号大体決まっている。では何が心待ちにさせるのかと考えてみると、そこに感じられる「たゆみない命の営み」とでも言えるものなのかと思う。小さな施設だから、毎月通信を作るのは大きな労苦に違いない。月報の類は、一号終わればすぐ次の号と続くため、年月を経る間に記事がマンネリ化したり、言葉だけが上滑りすることもありうるが、しかしこの通信にはそういう所が感じられない。それはおそらく、その施設で仕事に携わっている人々が、知的、身体的ハンディを負った人々との日々の交わりを本当に大切にしているからではないかと思う。相手を「かけがえのない大切な存在」として接する。それだけでなく、その人達によって自分も成長する、そんな相互関係を作ろうとする姿勢が、すべてを暖かく包みこみ成長して行くような命の営みとして感じられるように思う。

ハンディを負った当人、家族、世話する人々、支えている人々、それぞれの生きざま、福祉行政に関する事柄、福祉の根底にあるもの、思想、信仰、... 記事は色々なことを語りかけてくる。最近では、フランスで知的ハンディキャップを負った人々の生活共同体を提唱し、自らそこで共に暮らしているジャン・パニエという哲学者の言葉が印象に残った。彼は、そのような人を手助けする時に一番大切なことは何かと問われて、具体的援助は勿論大切だが、助けるという形で、逆に相手を押しつづすこともあり得る。だから、何か手助けするよりも更に大事なことは、「あなたはかけがえのない大切な人、あなたが生きてくれて私は嬉しい、という思いをもって接し、その思いが相手に伝わるように触れ合っていくこと」と答えている。一方的に世話をするのでなく、お互いに与え、与えられる関係、受け入れ合える関係、それだからこそ情熱が生まれ持続する関係を、彼は自らの共同体で実践しているという。

ジャン・パニエは、別の箇所で、希望の大切さを語っているが、ここではV.フランクルの『夜と霧』から次の文を引用している。「・・・この世に何も残さなかった人も、瞬間であれ、愛する者を思うことによって、至福を知ることができるのだ。全くの悲惨の中で、人間が積極的に活動して自分自身を表現できない時、ただ出来ることといえば、・・・名誉ある方法で・・・その苦悩に耐えることである時に、このような状態の中にあっても、人間は自分の愛する者の像を心に抱いて、それを愛しく瞑想することによって自分を成就することができる」。... 学生時代に深く魂を揺さぶられた幾冊かの書物。そのうちのひとつであるフランクルのこの本は、人間の残虐さと悲惨と同時に、極限状況での人間の尊厳、人間の存在の意味を圧倒的な力で語りかけてきて、私は長い間その感覚から逃れられなかったことを思い出す。

こういう形で、学生時代に出会った本との思いがけない再会の喜びも、時として与えられる。若い頃に心に刻まれた本は、その感動の内実を受けとめようと生きて行く中で、体験によりその理解も深まり、変化して行くものである。震える思いで読み継いで行った当時と余り変わらない自分を発見して、自分の中にある核のようなものについて考えさせられたり、当時は捉えきれなかった意味を自分なりに捉えられるようになっていくことに気づき、その事実の裏にある時間と経験の重さに思いをいたしたりと、このささやかな通信は私の中に、様々な思いを呼び起こしている。

(外国語学部助教授)

読書感想文コンクール実施について

学生のライブラリーセンター活用を一層活発化させ、読書意欲をさらに向上させるため、昨年度に引き続き、今年度も第2回読書感想文コンクールの作品を募集しています。その詳細な実施計画は、次のとおりです。

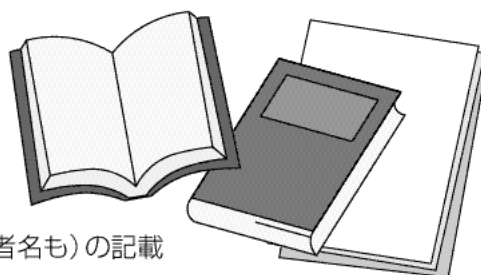
第2回

読書感想文コンクール

募集期間 平成14年 7月1日(月)～10月末日

- 応募資格 北陸大学学生
- 対象図書 ライブラリーセンター所蔵図書(単行本)
- 作品内容 上記図書の感想文
- 書式等
 1. ワープロ原稿
 2. 縦長A4判用紙使用
 3. 横書き、文字サイズ10.5～12ポイント
 4. 字数1,500～2,000字程度
 5. 図書名及び著者名(翻訳書の場合には訳者名も)の記載
 6. 学籍番号と氏名の記載

(注)5,6は字数制限に含めない。
- 主 管 北陸大学ライブラリーセンター
- 後 援 学術資料委員会



問い合わせ先：ライブラリーセンター本館・薬学部分館

編集後記

昨年度は、第1回読書感想文コンクールを開催したところ、全学部から、多種多様な作品78件の応募がありました。周知のとおり、今年度も、第2回目を開催いたします。更なる成長を遂げられた学生諸君の応募を心よりお待ちしております。

CONTENTS

| | |
|------------------------------|----|
| 簡素な生活 | 1 |
| 私のワシントン留学時代のライブラリー活用法 | 2 |
| 病気の予防と治療 | |
| - 東洋医学の考え方のエッセンス - | 3 |
| 寄贈図書 | 5 |
| 未知との遭遇 | |
| - 更なる図書の利用促進を願って - | 6 |
| 勉強の宝殿 - CLEVER HOUSE - | 7 |
| 図書館利用の勧め | 8 |
| ささやかな楽しみ | 9 |
| 読書感想文コンクール実施について | 10 |

北陸大学ライブラリーセンター報
NO.14 2nd-Half 2002

平成14年10月15日発行

編集・発行：北陸大学ライブラリーセンター
〒920-1180 金沢市太陽が丘1-1
TEL . 076-229-3021
FAX 076-229-4850
ライブラリーセンターEメール：tlib@hokuriku-u.ac.jp
北陸大学ホームページ：http://www.hokuriku-u.ac.jp/
印 刷：カンダ印刷株式会社